

■研究調査レビュー

沖永良部における農業と人間形成

狩野 浩二 (鹿児島大学教育学部)

1. 教育学研究と農業・人間形成史への着目

教育学研究において、人間の子育てや形成的営為のありよう―民間の子育て・形成の事実―に関心を持つということは、それほど古い頃から始まったものではありませんでした。さかのぼったとしてもせいぜい今から40年くらい前のことです。今日では、文化人類学や民俗学などの研究成果に学びつつ、教育や教育学の研究を志す研究者がしばしば見られるものですが、筆者が学生の頃にはまだまだそうしたことは非常に稀なことでした。今日においても、教育史研究といえば、それは制度史、政策史を指すものだという発想は、根強いものですし、人間形成史や教育実践史などというものは学問ではない、扱う資料を聞き取りなどに頼っているのでは、歴史性や時代性にあいまいさが残るといような批判が多くあります。ことに、文書資料を絶対視する研究者には、“聞きとり”、“聞き書き”という調査手法がもともと発想としてないように思われます。

教育学研究において、人々によって“生きられた歴史”を明らかにしていくこと、いわば、人間形成の全体史に光をあてるということが中内敏夫を中心に展開し、今日ではひとつの流れを形成してきています(中内敏夫『人間形成の全体史』1998年、大月書店)。ここにおいて展開してきた教育史研究の成果は、かつての制度・政策史のみの教育史研究、文献のみを頼みとする教育史研究から新たな地平を切りひらく成果をあげました。そうした展開のいわば前史は、1950年代の小さな研究グループであったとってよいと思います。

“民間研(みんかんけん)”と呼ばれたこの

グループでは、東京大学教育学部の大田堯研究室のメンバーを中心として、当時、収集されはじめていた教育雑誌の発掘、読解という作業を緻密に行なうことをはじめました。日本の教育史研究は、当時においてはそのほとんどが教育制度、政策史中心であり、“民間研”は、そうした流れでは網をかけることの出来ない小さな学校や一教師の、小さな実践を掘り起こし、そこに豊かな教育の遺産を発見しようという発想の研究を開始しました。

そうした仕事と並行するかたちで、日本の民衆―歴史上に名を残すことが稀である人々―が無意識のうちにこなしてきた人間形成の“ワザ”、“知恵”の発掘という作業が開始されました。何れも“教育実践史”と呼ぶにふさわしい、子育てや教育の仕事における本質部分への着目が、この小さな研究会から始まったとってよいでしょう。そして、この研究を通して、人間が行なう創造的な仕事の価値というものへの関心が、その後の教育や教育学の研究に大きな影響をあたえたといつてよいと思います。

民間研がはじめた学習会の様子は、研究会が最初の研究成果として出版した中内敏夫・大田堯編『民間教育史研究事典』(1975年、評論社)に記録されています。『民間教育史研究事典』は、一時期古本屋で高値取引がされ幻の事典と言われていましたが、92年に第二刷が出て、若干の補訂がなされました。この資料は、民間研の1960年代における仕事をまとめたものであり、当時における教育史研究の実情と民間研での研究成果を知るうえで非常に大事な資料となっています。当時、研究会の事務局的役割をしていた横須賀薫は、

同書のなかで当時の様子を次のように伝えています。「わたくしたちの研究会活動のいちばん基底をつくってきたのが、定期的にもたれた輪読会である。この会は、共通したテキストについて、その場で読みあい、そこに含まれる問題点について討論する、そして、その場だけで決着のつかない問題や派生して生まれてくる問題については分担して調べ、研究して後日この会に報告し、討論する、というかたちですすめられてきた」(561-562頁)

今日においても「民間研方式」として研究会で受け継がれてきているこのような研究作業を通して結実した『民間教育史研究事典』では、「一人前」、「群(むれ)教育」「子供組」「こやらい」「産育」「しつけ」などの民間習俗の概念を教育学的に読み解く試みが大田堯らによって果敢になされています。ちなみに教育学におけるその時代ごとの研究水準の指標となるといってよい大事典類を見てみると、例えば1990年発行の『新教育学大事典』(第一法規、全8巻)では、「子ども組」「こやらい」などの概念が単独項目としてあらわれていますが、しかし、同じ編者による1978年の『教育学大事典』(第一法規)には、こうした概念自体が関連項目としてさえもあらわれていません。こうしたことを見る限りにおいて、民間習俗への着目とそこにみられる人間形成の事実に対する接近という仕事は、民間研の行なった仕事の中で、教育学研究の枠組みをひろげる大きな意味をもつもののひとつであるといえると思います。

こうした一連の動きは、民間研が機関誌として発行している『民間研通信』(民間教育史料研究会発行、1965年10月、謄写版刷り。第2号から『民間教育史料研究』と解題)として公開され、また、その後、ほぼ十年おきに研究成果が公刊されてきています(大田堯、中内敏夫、民間教育史料研究会編『教育の世紀社の総合的研究』1984年、一光社。中内敏夫、田嶋一、橋本紀子、民間教育史料研究会

編『教育科学の誕生』1997年、大月書店)。

民間研は、その後、日本各地に残る人間形成に関する習俗調査をすすめるようになります。大田堯『大田堯著作・論文・文章一覧』(1999年、一ツ橋書房)によれば、1975年3月に岐阜県恵那地方で、4日間にわたる習俗調査を民間研と大田研究室の共同で行なっています。また、それぞれの調査報告は、77年10月『長野県飯山市富倉地区・教育習俗調査報告』(民間教育史料研究会発行)、78年8月『中津川市阿木地区教育習俗調査報告』(同発行)などにまとめられました。

その後この仕事は、研究の中心となった中内敏夫によって「人々によって生きられた歴史」としての民間教育史研究へと展開していくことになり、1983年から刊行された『叢書一産育と教育の社会史』(全5巻、新評論)に結実します。この叢書では、ヨーロッパでの社会史研究の紹介が中心となりましたが、1990年から刊行された『叢書産む・育てる・教える匿名の教育史』(全5巻、藤原書店)において日本の列島社会を基盤とした本格的な研究の出発へとつながっていくことになります。

こうした研究展開を俯瞰してみると、1960年代から約30年くらいの時を経て、日本における教育史研究の裾野が広がってきたことが分かります。若干の曲折はあるものの、その系譜には“民間”という視点が通底しており、私たちひとりひとりが経験する人間としての生活、生き方への着目があったといえると思います。そして、このような研究関心のもとで筆者は、沖縄本島、粟国島、伊江島、沖永良部島などの琉球弧の島々における人間形成のありようについての調査をすすめてきました。本稿は、近年調査をすすめた沖永良部における人間形成と農業技術の形成、伝承について光をあてるものです。

2. 沖永良部の人間形成と子育て—新しい共同体の構築

沖永良部島を訪ねた最初の頃（2001年2月）、島における農業が大変盛んであることに驚きました。地元の方に聞いてみると、それは例えば西郷隆盛公のおかげであるとか、そもそも勉強熱心な土地柄であったとかいうような答えが返ってきました。はたしてそこにはどのような秘密があるのか、私なりに検討してみた結果、伝統的な共同体が維持してきた人間形成システムの残像とでもいってよいものが、あちこちにかたちを変えてあらわれているということに気がつきました。具体的には、その共同体のなかで、①〈情報共有〉という視点と、②一度島を出て〈島外での経験〉をしていくということ、さらには、③島内の行政機関が住民を大事にするという視点をもっていることなどで、こうした点についてはこれまでにいくつかの文章に書いてきました。それに加えて、現在では、④〈心をひらく〉ということについて考えてみたいと思っています（詳しくは、狩野「農業における人づくりと学習」、『沖永良部の家族と子ども・青年の地域自立的発展の役割』、533-561頁、神田嘉延編著『環境問題と地域の自立的発展』2004年、高文堂出版社所収を参照してください）。

まず、情報の共有ということについて思い至ったのは、花卉栽培にあたって市場での値動きや各地に調査に出かけていった人たちがもたらす情報などを島の人たちが共に分かち合うということを知ったからです。当初は、FAX機や専用端末を活用した情報のやりとりに注目し、地域のケーブルテレビなどそうした「もの」に筆者自身は目を奪われていました。しかしながら、実際に地元の方の話を伺ってみると必ずしもそうした情報機器の開発、普及が島の人々の交流をつくりだしたということではないことがわかってきました。そのことは、筆者自身がパソコン通信のプロ

バイダとして早くからサービスを開始したニフティサーブの「現代文化研究フォーラム」での経験を通して、実感していたことと重なるものでした。ニフティサーブでの経験は、ネットワーク上の会議室を舞台にして、日々交わされる電子的な文字（手紙）によって、情報のやりとりをするというものです。それがやがて1997年4月に刊行された『電子横丁の日々』（現代文化研究フォーラム年報95/4～96/3、株ニフティサーブ）として結実しました。

このフォーラムの主催者（システムオペレーター）である社会学者の加藤秀俊が構想したネットワーク上のフォーラムの実際とそこにおける課題ということと、沖永良部での情報通信機器の整備、普及との関わりを考えてみると興味深いことが分かります。ネットワークを通じて通信機器自体がやりとりする情報は普遍であり、変化しないコトバ、事実です。それに対して、私たちの意識というものは、その時々で常に揺れ動いており、変化し続けています。同じことば（文字）で伝えたと考えていても、相手の受け止め方は昨日と今日とでは異なります。したがって、単なる情報のやりとりでは、それを受けとめた人間の心の襲まではすくいとれないということなのです。そして、その過程では、行き違いが生じ、人間関係がこじれてしまうことがフォーラムの内部ではしばしばありました（内野晴仁『葛藤するインターネット』1997年、窓社など参照）

こうした経験をもとに、沖永良部において情報機器を通してもたらされる情報以外に、日常的な人間関係の上で交流があり、そのなかでのやりとり（相手の受け止め方、心情を含めたやりとり）こそが重要ではないかと思うようになってきました。つまり、情報機器による交流というものは、あくまで補助的なものであり、実質的にはお互いに顔を合わせて話すことが大事にされているとあってよい

と思います。これは例えば、筆者の経験からいえば、1990年代に生活した沖縄においては、郵便による手紙のやりとりよりも、電話で直接話すことの方が大事にされていました。電話の場合には、肉声のやりとりとなりますから、文字よりはるかに伝わる情報量が多いはずであり、手紙より相手の状況を即座に知りつつ交流できるというよさがあるのだらうと思います。

だいたい前のことになりましたが、外国語教育と情報教育で有名になった会津大学を訪ねたとき、この大学では、教職員による会議をすべてパソコンを通じて文字を介して行なっていました。今から15年くらい前にすでにそのように情報機器が開発され、普及していました。そこで興味深かったのは、そのように最新機器を活用して便利なようである、実際には会議の後で居酒屋などを舞台として再度話し合わなければ大事なことが何一つきめられないということでした。パソコンという最先端の機器と居酒屋といういかにも旧時代の交流場所が同じ文脈で比較されるところが興味深いところですが、記述言語のやりとりはかなり慣れていると思われる研究者であっても、パソコンでの会議（主として文字を介して行なわれるもの）では、思うように話し合いがすすまないということなのでしょう。

第二点は、沖永良部島の若者たちの9割近くが青年期を前にして一度は島を出て行き、その後、若者たちが再び島に戻って活躍しているという事実です。島を出るということは、島とは異なる生活体験をするということですが、多くは都市部での就学や労働を経験し、その後島に戻るといことになるわけです。青年期とは、若い人たちが一定期間社会に出ることを猶予されるということです。そのあいだに自分の生き方をめぐって試行錯誤をし、世界にひらかれた人生設計をしていくことが可能となりました。かつての共同体では、共同体内部の形成的営為（通過儀礼など）によっ

て、本人の意志は別にして、短時間で子どもから大人へと若者たちは変身させられており、社会的移動が難しい状況だったことと対照的な状況が、都市部を中心にして生まれてきたわけです。田嶋一の研究によれば、日本の列島社会に青年が現われ始めるのは、共同体の崩壊にともなって生じた都市への集住とそこでの教育による社会的移動をめざす教育家族があらわれてくる1920年代ということになります（田嶋「共同体の解体と〈青年〉の出現」、『叢書 産む・育てる・教える』第1巻『〈教育〉—誕生と終焉』、41-42頁、前出）。田嶋は、当時において青年期を十分に享受できたのは、都市で生活したごくわずかの若者たちだけであったといえます。大部分の若者たちは、共同体の内部で、そこにおける秩序を守りながら次世代の担い手として成長していったわけです。沖永良部において考えてみれば、島を出て行くということは、就学や就職をめざすことと同時に、島に留まっていたは経験することがなかなか難しい青年期を手に入れる絶好の機会であり、これを契機にして、世界にひらかれた生き方、逆に言えば自ら選ばなければ大人になり損なう生き方を手に入れたとってよいのではないかと思います。そのことが海上交通網の整備・発達の早かった離島において効率的に展開したのではないということなのです。このことは、あくまでも推測ですが、沖永良部におけるリーダーたちの自己形成史を丹念に調べていくことによって、彼らによる青年期享受のありようがやがて明らかになるのではないかと思います。

第三点は、行政機関と住民との相互理解、住民同士の交流の在り方が、内地とはかなり異なっているということです。沖縄の離島にもしばしばみられることですが、和泊町役場を訪ねてまず驚くことは、職員同士が名前（ファーストネームやあだ名）でお互いを呼び合っているということです。和泊町国頭地

域を訪ねた際に区長から見せていただいた回覧文書には、それぞれの報告事項ごとに管轄の部所が記されており、そこには行政担当者の電話番号が記載されていました。実際、和泊町役場には町民から直接電話がかかってくるわけで、そのやりとりは実に家族的であり、実感のこもったものでした。

こうしたかわりあいの様相を、私は新しい共同体の在り方として問題提起したことがあります（狩野「沖永良部の家族と子ども」前出）。かつての共同体は生産手段を共有するという方法で互いの家がむすびつきを強くしてきました。それに対して、現代型の共同体は、いわば情報を共有するという方法で結びついているのではないか、その情報は、農業者においては、市場での販売価格であり、病害虫への対処法など、生産に関わる重要な情報です。つまり、ここでの情報は常に実生活に切り結んだもので、具体的なものであるという特徴があります。

私たちが島の中堅農業者の方を訪ねた際に、話の途中から島の若者がやって来ました。彼は、私たちとも挨拶を交わすと、その農業者の方にいろいろと質問をしています。内容は、自分が育てている花が病害虫にやられたらしいことと、それに対する対処をどうしたらよいかというようなものでしたが、後でその若者との関係を聞いて私たちは大変驚きました。それは、訪ねてきた若者とアドバイスをした農業者とは、この時が初対面であったということです。端から見ている私は、てっきり昔から知り合っている仲であり、こうした相談を今までにもしてきているのだろうと思い込んでいたのです。そう思わせるほど、最初からごく親しげに話しているのです。ところが、実際には初対面で、このように旧知の仲のようにして話ができるということ、それも年齢的にはかなり違いのある二人が相談しあう様子にすっかり驚いたものです。

3. 心をひらくということ、心とからだをどう育てるか

以上の三点を振りかえってみると、沖永良部においては、かつての共同体的な空気を残しながらも、若者たちが島を出ることによって青年期を享受することが可能となったということがわかります。そして、このことによって社会的移動が可能となり、また、一度島を出た青年たちが帰島することで島におけるリーダーが育つ環境が生まれたということになります。

彼らにとって島を出るということは、つまり、島以外での生活環境に自分の身を置くことであり、そのことによってふるさとの島に対する認識を新しいものにしていく契機となるわけです。また、以前より人々の直接的な交流によって、生活に必要な情報を共有しあうことを大事にしてきているという点で、人々の紐帯が伝統的に強いということ、いわばかつての共同体から情報共有型の新しい共同体への移行が比較的スムーズに行なわれたということではないかと思えます。そして、そこで核となるのは、人々が心をひらいて交流し合う空気をつくりだしていることであり、少し前の時代までは飲料水を確保することにも苦労しなければならなかった島の暮らし自体が、島の人々の“身体技法”を高めるために重要な意味を持っていたのではないかということです。

“身体技法”とは、身のこなし、シツケ、ワザなどといわれるような、人間のからだを通じた学習の在り方、特に伝統的な学習システムにおいて大事にされてきたものです。今日では、稽古事の世界や能、狂言などの古典芸能、柔道などの武道の世界で身体を通じた学習を大事にすることが残っていますが、これらは教授—学習過程論でいえばすべて個別学習の系譜であり、また、“形成”と呼ばれる方式で“ワザ”や“知恵”を身につけていくことになります。“ワザ”や“知恵”は、言語

によって記述できない要素を多く含むものであり、これらを習得するには身をもって“習う”ということが大事になってくるわけです。

こうした“習う”という“ワザ”や“知恵”の習得方法は、実は人間の“脳”と“身体”の関係からすれば、大変重要な学習システムであるということが近年いわれるようになりました。教育実践の世界では、1950年代に児童の表現活動の持つ意味に着目した斎藤喜博が、群馬県島小学校において、授業と学校行事をとおして児童の心をひらく仕事をすすめました（狩野「島小の教育実践—学校行事」『鹿児島大学教育学部研究紀要（教育科学編）』第55巻，131-158頁，2004年など参照）。斎藤の仕事によって児童の認識活動と表現活動の一体的な指導というものが、彼らの心をひらき、“身体技法”を育てるのであり、子どもの発達にとって大きな意味を持つということがはっきりしてきました。その後、斎藤が大学における教師教育に関わるようになり、同時期に演劇の世界における“演出”概念を援用した“身体づくり”を子どもや教師を対象に行なった竹内敏晴が、子どもや教師の“からだ”の在り方について発言するようになります。竹内によれば、現代の子どもや教師たちの多くは、第三者からの指示を待つことになれてしまい、身体は、常に次に起こる状況を待つこととなり、今という大切な時間に対応することが出来にくくなるというものでした。次を待つという身構えのよって、身体が硬直すれば意識もまた堅く閉ざされたものになるということが「身体づくりのレッスン」を通して、次第に明らかになりました（竹内『ことばが劈かれるとき』1975年，思想の科学社など）。竹内とほぼ同時代において、身体解放という視点から体育指導における発想の転換が体育教師であった野口三千三から提起され、身体の外制緊張を取り去ることによって、心身を調整することが学習の上で大事であると分かってきました。後に野

口体操として広がり、教育や芸術などの分野における「からだ育て」として定着していきます。（野口『原初生命体としての人間』1972年，三笠書房など）。

島における生活は、農業を基盤とする限りにおいてこれからも自然環境と密着したものであり続けるでしょう。そのなかでは、行為や行動を通して“知恵”や“ワザ”を身に付ける“形成”的な営為が今後も大事にされます。そして、現代社会においては置き去りにされてきたからだを自ら治める“身体技法”（シツケという言葉で伝統的に言い習わされてきたこと）が島には残ることになります。こうしたかつての共同体の特長が残りながら、その上に情報という“コトバ”を介した新しい共同体づくりが沖永良部において展開してきています。島の人々が農業生産の知恵やワザ、生活上の知識などをお互いに学び合っているのは、無意識のうちからだを育て、心をひらいた生き方を実現しているからであると想像しています。沖永良部では、いわば伝統的共同体と新しい共同体がうまく融合しつつ、島における子育てや教育が成立しているといつてよいのではないのでしょうか。

4. 成果と課題

教育学研究において、人々の暮らしにおける子育ての意識や習慣そのものに注目すること、いわば子育て・教育（広義の“教育”であり、狭義では“形成”）の実践史を明らかにするということは、今後非常に大事になることであると思います。それは、現代社会における子育てや教育の困難状況を生じせしめているものが、実は私たち自身が創り上げてきた社会であり、あえていえば、困難な状況を私たち自身がつくって来てしまったといつてよいからです。子どもが育ちにくい環境を創り上げてきたのは、何より私たち自身ですし、そうしたなかにあつていかにして人間の幸福を追求することが可能となる社会づくりを実

現させるか、人間の発達という根本に立ち返って考え直すことが何より必要となるでしょう。その際重要となるのは、人類史の誕生以来連綿と行なわれてきた子育て（形成的な営為）のあり方に関心を持つということでしょう。私たちの祖先たちがどのようにして人間という種の持続をはかってきたのか、人間らしい生き方を次世代に受け渡してきたのかということに光をあてることで、今日私たちが直面している発達阻害的な状況というものの根本原因の追及とそのもとでの子育て、教育のありように関する知見を手に入れることが出来ると筆者は考えています。それを広く「教育実践史」としてとらえ返してみたいと思っています。

児童・生徒に関わる深刻な問題状況というものは、私たちの社会に限って生じているということではありませんが、しかし、それにしても何とも心のはれない痛ましいニュースが続きます。それぞれの事件の背景にはさまざまな要因があり、複雑にそれらが絡み合っています。ただ、こうした問題状況に共通することの一つが、児童生徒の“からだ”をめぐる一種の発達阻害的な状況であることは間違いありません。解剖学者の養老孟司が指摘しているように、畳の上で正座をする生活を長い時間続けてきた日本列島社会の人々が、あっという間に洋間で椅子に腰かける生活へと変わってしまいました。蛇口をひねれば水が出て、ボタンを押せばお湯が沸くことに象徴されるように、時間や労力をかけなくても、誰でもたやすく答えが出せるかのように考えてしまう“モノ”や“コト”が世の中にあふれています。そうした生活上の変化とともに、若者たちの体躯は以前に比べれば大きくなってきています。このように、大人たちにとっては便利この上ないものの、その反対に子どもや若者たちが発達していくうえでマイナスに影響しやすい都市型の生活環境のなかで、かれらの“からだ”をどのようにしつけていっ

たらよいか、どう育てていけばよいかということが、これからは大きな課題となるでしょう（『養老孟司の“逆さメガネ”』2003年、PHP研究所）。いわば、小さなからだを伝統的な生活の中で使いこなし、しつけてきた私たちの“身体技法”の型や様式といったものを、現代の生活様式に合わせたかたちでどのように伝えていったらよいか、これから試行錯誤していくことになるでしょう。現代人の大きな“からだ”を“しつける”新たな生活指導の枠組みをからだを育てにくくしてしまった都市型現代社会の中で、どのようにしてつくっていけばよいのでしょうか。ひとつの鍵は、伝統的な社会において私たちの祖先が築き上げてきた子育ての知恵であり、それを支えていた生活環境に着目することです。私たちには今後そのことを再び学び直す作業が必要であると思います。

沖永良部での新しい共同体づくりのもとで、新旧の共同体のよさや島の自然環境を生かした子育て、教育の創造的仕事が今後どのように展開していくのか、島のおとなたちの願いを子どもや若者たちがどのように受けとめ、そしてどのような生き方を選んでいくのか、見守っていきたいと思います。